目白大学　人文学研究
第６号　2010年　127－140

「きっと」考

A Note on *Kitto*

山西　正子
Masako YAMANISHI

Abstract

This study discusses the prevalent combined use of “kitto” and “kamoshirenai” in a single sentence in speech and writing of contemporary Japanese. “Kitto” originated as an onomatopoeia and meant a state of showing accuracy or strictness in ancient Japanese. In modern Japanese “kitto” has been used to express the speaker’s confidence, as in the phrase “kitto kurudarou”. However, in recent years, it has been often used in combination with “kamoshirenai”, which alone refers to “possibleness”, as in “kitto kangaeta kamoshirenai”.

This phenomenon can be understood as a semantic shift in the usage of “kitto” toward its increased accommodation of “possibleness”. Thus, this usage of “kitto” suggests its new function in both spoken and written Japanese.

キーワード：「きっと」、「かもしれない」、「確認」、「確信」
Key Words：“kitto”, “kamoshirenai”, confirmation, confidence

【構成】

０　目的と問題のありか
１　「きっと」の発生と現状
２　「きっと」と過去の事象
３　「疑問」要素の介在
４　「かもしれない」について
５　関連事項

やまにしまさこ：外国語学部日本語学科教授

0　目的と問題のありか

0．1　目的

近年、日常接する日本語において、稿者の規範意識あるいは多くの辞書の記述と合致しないものが散見される。

その一つが、副詞「きっと」の用法である。稿者の規範意識では、オノマトペ用法ではなく、話者の「確信」を表現する場合は、終止形もしくは「だろう／はずだ」など然るべき表現と共起するはずの「きっと」が、「確信度」という把握態度では説明しきれない「かもしれない」と共起する例である。

これは「きっと」における「用法の拡大」である可能性があると考え、現時点での状況を記述し、以下の５点を指摘する。

合わせて、オノマトペ用法ではない「きっと」使用をめぐっては、判断の基準が「確認」から「確信」へ移行している可能性を提言する。なお「確認」と「確信」は仁田義雄（1997）から示唆されている。

① 現代語では、「きっと」と過去の「た」との共起が発見しにくくなっている。すなわち、過去に生じた事象で「確認」可能であり、「きっと・・・だった」のようなかたちで、「いつも」「必ず」の意味を持つ用法が激減していると考えられる。この用法は1900年前後の文学作品には、しばしば出現しており、この観点からいえば、「きっと」は過去約100年の間に用法を狭めたことになる。

② 近年、ことに、インターネット上で、「きっと」と「かもしれない」が共起する例が散見される。原義的にいえば「ゆるみのないさま」を表現したオノマトペ「き」に由来する「きっと」が、「確信」という点で問題のある「かもしれない」と共起するのは整合性を欠く。しかしその定着の度合いはともかく、これが現代語の一部で生じているのが現実である。

③ ただし、この、「きっと」と「かもしれない」の共起は、少なくとも武者小路実篤まで遡れるのであり、近年、急に「出現」したのではない。

④ 「きっと」は、話者が「確実」と判断する場合は、未来の事象についても使用する。「未来」は、実のところすべて「確認」できず、「確信」するのである。しかし未来の事象を「確実なもの」と「推量」して「確信」する「きっと」があるのだから、「確信」の点で問題のある事象にも「拡大解釈」が及んで「きっと～かもしれない」という形式が生じることは考えられることではある。

⑤ 「かもしれない」は可能性を表現するものである。結果的に実現されないことにも「かもしれない」は使用できる。「もしかしたら実現しないかもしれないが・・・」の含みを持つ「かもしれない」は、現代語の「ハッキリとは断定しない」表現傾向の一部となっているとも考えられる。「きっと」で先に話し手の確信を示しつつ、後に「かもしれない」で聞き手に判断を押しつけない態度を示すこの共起形式は、それなりの存在価値があると認めたい。

０．２　問題のありか

稿者が接して違和感を持った、「きっと」と「かもしれない」が共起する文章を示す。

（１）（故人になられたＫ先生はご長命であったなら）きっと私のような眺望をお考えだったかもしれない。（下線稿者、以下同じ）

著名な研究者による新書（2007年刊行）の「あとがき」である。

しかし、稿者の違和感は、「時代遅れ」の側面がないともいえないようである。すなわち、周辺の若年層の会話には使用されており、インターネットで「きっと」と「かもしれない」を合わせて検索すれば、ただちに使用例に行き当たる。（確認は2009. 9. 17）

（例１）　それは**きっと、当然の事かもしれない**。「あ、あの … 否、かなり目立つ部類**かもしれない** … 珍しい蒼という色彩を持つ長い髪。 … なんかこう … ソウルをかけた戦いってきっとああいうのを言うのよね? … と、…

homepage3.nifty.com/coolbeautylove/zill-rem-bday2005.htm

（例２）　歓迎されることなく自衛隊を終わる**かもしれない**。**きっと** … **きっと**非難とか誹謗ばかりの一生**かもしれない**。君達は自衛隊在職中、決して国民から感謝されたり … きっと非難とか誹謗ばかりの一生**かもしれない**。御苦。君達 …

nekozemax.hp.infoseek.co.jp/mamoritai.swf

（例３）　妙、って言えば少しおかしな表現**かもしれない**けど … そうとしか言えないと思う。 … 初めて**かもしれない**。 いつもは気丈に振舞っているだから、尚更。 … **きっと**ずっと前から気付いてたの**かもしれない**。 気付いていたうえで、逃げてたんだ。 …

houka5.com/rannkuuno/hajimattabarizoku.html

そしてまた、この「きっと」と「かもしれない」の共起についての「違和感」がすでに、インターネット上で指摘されている。次のキャッシュによる。（確認は2009年９月６日）

hibi-heion.at.webry.info/200611/article_42.htm －キャッシュ　**作成日時：2006/11/30**

先日、フジテレビで放映している、奥様向けドラマっていうのかそれの予告編みたいなのを偶然見た。「紅の紋章」という番組だった。その予告編のなかで、キチンと記憶していないけれど、主人公とおぼしき女性が自問自答するセリフのなかで、「きっと、私が・・・かもしれない」と発言した。このセリフがなんだか気持ち悪くて、なんでだろうとしばらく考えてしまった。少し考えてわかった。「きっと」という言葉は、強い断定を示す言葉であるから、「きっと」ではじまった文章は「である」とか「に違いない」とかで結ばなければならない。会話だと、そのへんがあやふやになる場合もあるが、自分ではどうだろうと思うと、あまり「きっと」という確信を示すような用語を使用しない・でも使ったからには「きっと・・だよ」と結んでいる。実際の会話ではないのだい、セリフなんだからもう少しキチントした言葉遣いをしてほしいものだ。

すでにインターネット上では使用例があり、著名な研究者も出版物で使用する「きっと」と「かもしれない」の組み合わせではある。しかし、稿者以外にも違和感を持つ意見が、同じくインターネット上にあることも事実である。

この事実について考察する。

1　「きっと」の発生と現状

ここでは、近代以降の「きっと」を主対象として辞書の記述を点検する。結果として、「過去において確認できた事象」と共起する「きっと」に関わる現代語の例文は示されず、また現在、恒常的に生ずる事象と関わる「きっと」についても、現代語のレベルで言及する辞書は多くはないことを報告する。

1．1　辞書にみる通史的事実

『日本国語大辞典二版』（2000）は「きっと」について

㊀動作、行為が、物理的、心理的にゆるみのない状態で行われる時の、そのゆるみのないさま。

㊁判断、推定がほぼ確実、また、確実であってほしいと希望する時の、その確実なさま。間違いなく。

の２用法を示す。

㊀はまさにオノマトペであろう。現代語の、「相手をきっと睨みつける」「口をきっと結ぶ」と通ずる。以下、他書からの借用例は（＃１）のように＃記号で示す。

（＃１）　志保味五郎が頸の骨射きらんと、指しあて放ちたり。志保味きっとみて矢にちがはむと頸をうちふりたれ共、などかははづるべき（金刀比羅本『保元物語』（1220頃か）

さらに㊁については説明を細分化している。すなわち

①　ある動作が行われる、または、ある状態であることが確実なさまにいう。必ず。

②　ある事がらについて、自分の推測が確実であると信ずる時にいう。

の２分類である。①の用例は（＃２）、②は（＃３）で示す。

（＃２）　此恋首尾能（よく）取持なば、どなたでも小判の山を筑（つい）て、急度（キット）御礼申事じゃ（浮世草子『傾城色三味線』（1701））

（＃３）　屹度そうじゃ（『颶風新話』（1857））

史的にいえば、オノマトペの「き」に由来し、「ゆるみのない状態」を示したものが、19世半ばには、②のように「確実であると信ずる」事象について表現できるようになっていたと考えられる。

1．2　疑問例の存在

1．2．1　「確認」の「きっと」

オノマトペに由来する㊀から発展したと考えられる㊁の用法であるが、この説明文が指摘するのは、「ほぼ確実」であり、「推測」であって、「事実」ではない。また細分化された㊁の①も「行われる」「ある状態である」のように、「再現不可能な過去の確認」ではない。

辞書はスペースが限定されており、あえて例文を「過去形」にしないということもあろう。

しかし、「きっと」と過去の助動詞「た」が共起する例は現代語の場合、実際問題として、発見しにくいのである。

いま、徳川幕府御典医桂川家に生まれた今泉みね（1855～1936）の回顧談『名ごりの夢』の例を示す。

（2）（桂川家の食事は）主人だけはまったく別で、他の者とは雲泥の差でした。お膳もきっと添え膳がついていましたし〈略〉　（『名ごりの夢』1936平凡社）

この場合、㊁の用法と見なし、食膳の供し方が形式どおりで「一分のスキもなく」と理解できないこともない。しかし、「必ず／常に／欠かすことなく」の解釈が自然ではないか。「必ず添え膳がついていた」の解釈したいところであり、この「きっと」は過去の事象を「確認」するものと考える。

1．2．2　「確認」と「確信」の「きっと」

関連事項を述べる。『日本国語大辞典二版』は㊁の①の例として、『吾輩は猫である』（1905－06）の

（＃4）　近頃の赤ん坊は中々利口だぜ。其れ以来、坊や辛いのはどこと聞くと屹度舌を出すから妙だ。

を示す。これは、過去にも生じた事象で「確認」が可能、かつ現在もさらに今後も同様の動作が必ず生じると「確信」しているとの判断によるのであろう。「確認」と「確信」を合わせた判断を示すものである。

これは、用例（2）の場合とは異なる。（2）は、過去における事象であって、今後同様の状況が再現されることはない、「確認」はできるが、再現を「確信」できない状況を述べているのである。

現代語の「きっと」において、（＃4）のような、「確認」「確信」を合わせ持つ用法が存在することは否定できない。稿者の内省では、自然な文を作る。ただし、その用法に言及しない辞書もある。

現代語の「きっと」は、基本的には「未実現」「未確認」の状況に焦点を当てた、「確信」を表現するものであろう。「過去完結」の事象を「確認」するのみの「きっと」が一般的であるとは考えにくい。

現代語の「きっと」は「必ず」の意をもつが、多くの場合、それは、「話者の」、「現在および未来の事実への強い確信／強い意志／確信度の高い推量／他者への強い要求」に関わる。

そして（2）のように、過去においては「必ず」確認出来た事実であっても、現在および将来において生ずることのない、完全な「過去完結」の事象については、有力とはいいがたい。

「きっと」はこの点では勢力を弱めていることになる。

１．３　現代日本語の辞書の記述－過去完結と現在の確実な事象

まず、１．２の（２）で示した「過去完結事象」の「確認」用法が、現在通行の現代日本語を主対象とする、一般的な国語辞典では、記述されないに等しいことを述べる。ここでは、オノマトペに準ずる用法については言及しない。

１．３．a『明鏡国語辞典』（2002大修館書店）は

① 自分の推測が実現する可能性が高いという気持ちを表す。

② 話し手の決意が強いさま、また、相手に対する要望が強いさまを表す。

とし、例文「彼なら――合格するよ」「夕方までには――帰ってくるだろう」「明日中には――伺います」「明日は――来て下さい」を示す。いずれも、「未確認／未実現」の事象に関わる。

１．３．b『集英社国語辞典第二版』（2000）は

① あることが間違いなく行われると確信しているさま。

② 話し手の決意、相手への要望の強いさま。必ず。

とし、例文「昼からは――雨になる」「――お返しします」を示す。これも「未確認／未実現」の事象に関わる。

いずれも、「未実現／未確認」の事柄に関して、話し手の推測の確実さ・決意・要望などの「強さ」を表現するための語と説明される。すなわち、両書とも「きっと」が関わる代表的な事象は「未確認／未実現」であることを暗示しているのではないか。

１．３．c『岩波国語辞典第六版』（2000）は注目すべきである。ここでは上記２種とは若干趣が異なる。説明の中で▽の注記を付し、「きっと」の確信度に言及している。

① 話し手が間違いないと推し量る気持を表す語。「彼は――来る」「忘れないでね、――よ」。いつも、きまって。「上京のたびに――寄る」▽「必ず」より確信度の低い用法がふえてきた。「確か・確かに」の関係に似ている。

この記述が具体的に何を指し示すのか判然としないが、「確信」の度合いに注目していることは看過できない。

なお、説明②の中に過去の助動詞「た」と共起する例文もある。

② 話し手の語。間違いなく。たしかに。「――申しつけたぞ」＜注記略＞

しかし、この②の例文は現代語には、なんとも「なじまない」のではないか。稿者の感覚では歌舞伎などの古典芸能あるいは、テレビの時代劇の世界を想起することになる。

そして、この例文は「話し手の断乎とした気持」を表すもので、例（２）のような客観的事実を「確認」するものではない。現代語の「きっと」は、（２）の場合の、「た」と共起する「過去に生じた厳然たる事実」を確認することは、実際にはなされないと考える。

現代語「きっと」の基本的な用法は、「話し手の確信・決意」と他者への強い「願望」を表現することに限定される。

次に、１．２の（＃４）のような、過去の事象を確認し、現在と未来を確信する事象に関する用法について述べる。

１．３．ｃ『岩波国語辞典第六版』は例文中に、「いつも、きまって」の意味として「上京のたびに――寄る」をしめす。また『角川必携国語辞典五版』（2002）も「兄は街に出ると――本屋に寄る」「日曜というと――雨が降る」を示す。この、過去に生じた事実を「確認」しつつ現在・未来を「確信」する用法は、この２書で認知されている。

しかし、１．３．ａ『明鏡国語辞典』、１．３．ｂ『集英社国語辞典第二版』とも、このタイプの例文はない。また、『旺文社国語辞典第九版』（2002）も示さない。

この用法に関しては、『新明解国語辞典』の態度も参考になる。同書の第六版（2005年刊）では、第五版（1998年刊）が記載している例文「私が外出すると――〔＝いつも〕雨が降る・会えば――〔＝例外なく。すぐ〕けんかになる」が踏襲されずに・・・他の説明や例文は踏襲されるにも拘わらず・・・、削除されている。

編集主幹も交代し、別の視点が導入されたのであろう。しかし、これが完璧ではないにせよ、現実の反映であると考えたい。

一般的な国語辞典で見る限り、現代語の「きっと」は、しばしば、「未来」「未確認」「未実現」の事象と共起する用法が基本的であると認識されている。そして１．２．２の（＃４）のような、「過去」確認に基づき「現在・未来」確信を合わせ持つ用法は、記述されないこともあり、盤石とはいいがたい。

なお、収録語数の格段に多い辞書でも、事情はほぼ同様である。説明のキーワードと例文を示す（オノマトペ用法を除く）。

『大辞林』（1989三省堂）	「予測」「決意」「要望」、 「明日は――晴れる」「君なら――合格するよ」 「一〇日には――お返し致します」
『大辞泉』（1998小学館）	「決意」「確信」「要望」、 「明日は――雨だろう」「――来てくださいね」
『広辞苑第六版』（2008岩波書店）	「予測」「期待」、 「――失敗するだろう」「――来てね」

ただし、『日本語大辞典第二版』（1995講談社）には記述がある。説明のキーワードとして①「判断・予測の確実さ」、②「決意・要望」を記述し、さらに③に「常にある事柄が発生することを表す。いつも、きまったように」として英語alwaysと、例文「私が外出すると――雨がふる」を示す。

「辞書に書かれない」ことは、「使用されない」ことではない。しかし、一部の辞書に記載され、他では言及されない用法は、認知度が低いと考えるのが自然であろう。ことに、『新明解国語辞典第六版』（2005）が改版にあたって削除したという事実は、この用法の弱化の表れと・・・辞書の記述を実態の完璧な反映図とするのは短絡であるにせよ・・・考えたい。

２ 「きっと」と過去の事象

２．１　1900年前後の用例

用例（２）のように、「過去」に「必ず」生じた、そして今後生じることのない「過去完結」の事象の「確認」に「きっと」が使用された例は、かつては少なくはなかった。ただし「過去において必ず生じた事象として、臨場感を強調するためか、「現在形」で記述されることもあり（用例（３）（６）参照）、つねに過去の助動詞「た」と共起するとはいえない。以下に例を示す。本文の注記をしないものは「CD-ROM版新潮文庫の100冊」による。

（３）（民子は）その間にも母の薬を持ってきた帰りや母の用を達した帰りには、きっと僕の所へ這入ってくる。（伊藤左千夫『野菊の墓』1906）

（４）近所のものが見舞にくると、父は＜略＞きっと、私の卒業祝いに呼ぶ事が出来なかったのを残念がった。（夏目漱石『こころ』1914）

（５）母はそう云う言葉の前にきっと涙ぐんだ。（夏目漱石『こころ』1914）

（６）私が役所から帰って見ると、きっと安国寺さんが来て待っていて、夕食の時までいる。（森鴎外『二人の友』1915）

（７）（吉川夫人の相手になってその言動に耐え続けた人には）その代り辛防（マヽ）をし抜いた御礼はきっと来た。（夏目漱石『明暗』1916教育社『作家別用語索引』）

（８）（私は、再々、ナオミを自宅まで送ると云ったがそれを固辞して）花屋敷の角まで来ると、きっとナオミは「左様なら」と云い捨てながら、千束町の横丁の方へバタバタ駆け込んでしまうのでした。（谷崎潤一郎『痴人の愛』1924）

むろん、この時代前後の作家の作品中には「確信」の用法や意志・要求の「きっと」も共存しており・・・用例（９）（10）（11）（12）（13）・・・、1900年前後の「きっと」は正確さや確実さ、すなわち「ゆるみのなさ」を、実現/未実現に拘わらず、「過去完結」の事象をも含めて、表現する語であったと考えたい。

（９）きっとそれが利いたのでございましょう。（泉鏡花『高野聖』1900）

（10）家の人達にきっと何とか言われる。（伊藤左千夫『野菊の墓』1906）

（11）きっと何か口を探して下さるよ。（夏目漱石『こころ』1914）

（12）奥さんらしい奥さんにきっと育て上げて見せるから。（夏目漱石『明暗』1916教育社『作家別用語索引』）

（13）ほんとにお湯（ぶう）なら帰りにきつとよつておくれよ。（樋口一葉『にごりえ』1895）

２．２　2009年の状況―日刊紙の場合―

すでに０．２　問題のありかで示したように、現代語に「きっと」と「かもしれない」の共起はある。しかし、日刊紙の文章では、この共起の確例を、今回は発見していない。調査は、稿者の「手作業」のほか、「朝日新聞」データベース『聞蔵』を使用し、2009年７月14日から９月29日までの間に採集した132例の「きっと」を対象とした。

まず疑問例を１例示す。

(14)「その指はきっとちぎれた」（2009. ８．１　朝刊b3ページ「サザエさんをさがして」）

である。バケツの中に手を入れたサザエさんがスッポンに指をかまれるシーンの見出しである。1966年当時、東京に野生のスッポンがいたこと、その噛み切る力が強いことを紹介している。見出し文が「指を噛まれればその指は必ずちぎれた」の意味とすれば、真偽のほどが疑われる。サザエさんの指がちぎれたとは承知していない。「必ず」が事実どうか確認する必要がある。実際、記者は末尾に「サザエさんの指がちぎれなかったか心配になった」と書いている。

とすれば、この「きっと」は「だろう」を予想させる一般的な用法か、「かもしれない」を言外に窺わせる、「確信度」に問題のある、「新しい」用法の「きっと」である可能性を持つ。

この用例（14）を除外すれば、他の「きっと」の大半は、「だろう／でしょう」を明示する確信度の高い推量や、「確信」を表す。

(15)　祖父もきっと天国で見守っているでしょうから。（2009. ８．24　朝刊18ページ「声」）

(16)　このギターを弾くと、きっと勇気が出るよ！　（2009. ８．26　夕刊14ページ）

(17)　忘れ物を取り戻す機会は、きっとまた巡ってくる。　（2009. ８．９　朝刊18ページ）

３　「疑問」要素の介在

３．１　「きっと」と助詞「か」

発生時には「物理的、心理的にゆるみのない状態」を表現したにせよ、「きっと」にも変化が生ずることはあり得る。

夏目漱石にしても、若干の「ゆるみ」を介入させたかの感がある。

(18)　この男の名前もきっとその髭を虐殺する様に町人染みていはしまいかと思われた。

（夏目漱石『明暗』1916教育社『作家別用語索引』）

助詞「か」が「きっと」と共起するのである。この「か」は疑問ではなく反語で、「～ないことがあるだろうか、いやあるはずだ」を表現し、「含み」としては「確信」といえる。

漱石の用法において、助詞「か」と「きっと」は共起できた。100％確信の直接表現を使用せず、「少なくとも一度は疑い」あるいは、「ほんのわずかであっても疑問を差しはさみ」、その後、これを否定することで、間接的に「確信」することがなされたのである。

この観点からすれば、現代語にも「きっと」と「か」の共起は、多くはないが生じている。「きっと」があることで、話者の確信度は高いが、若干のためらいを一度は示してみる、そして最終的には「確信」する場合の表現と考えたい。

(19)「きっと三好晃子から谷口のことを聞いていたんじゃないでしょうか」

（赤川次郎『女社長に乾杯』1984）

(20)「それに私が教えても、あなたきっと信用しなかったんじゃないかしら？」

（村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』1988）

(20)「きっと、ご本人（稿者注・詩人西条八十）が小説家にならず、後悔していたからじゃ

ないかしら」　　（詩人新川和江の発話　「朝日新聞」2009.　3．31夕刊１ページ）

このようにして、現代語でも「ではないでしょうか」「かしら」を使用し、「きっと」と助詞「か」を同時に使用することがわずかながら許容されている。用例（18）の『明暗』時代から、絶えることなく続いていたものであろう。

３．２　「きっと」と助詞「か」―最近の日刊紙の場合―

最近の状況を日刊紙から観察する。２．２の調査中に「きっと」と「か」が共起する例を確認できた。そこでも示したように、「きっと」の大半は、「だろう／でしょう」を明示する確信度の高い推量・・・用例（15）・・・や、終止形のみで「無標」の「確信」・・・用例（17）・・・のために使用される。

その中で、10％弱の「に違いない」「はずだ」による確信度の高い判断を表す用法がある。

（22）（私の髪は）幸い白髪もないので、きっと周りの人は染めていると思っているに違いない。　　（2009.　７．19　朝刊24ページ）

（23）　歴史を学び多くを考えておくことは、将来＜略＞きっと役に立つはずです。　　（2009.　８．６　夕刊６ページ）

さらには、３．１の用例（21）からもその存在が予測されたが、この132例の中に、「ではないか」と共起する例が、「に違いない」「はずだ」には及ばないものの、複数ある。２例のみ示す。

（24）　自分で自分を制御できない苦痛に、「きっと死ぬ方が楽じゃないか」とまで思うようになった時があった。　　（2009.　９．19　朝刊b4ページ）

（25）（稿者注・義父の臨終に喪服持参で駆けつけたことを悔やむ女性を慰める投書）（お義父さんは）きっと今空の上で、その時の行動をほめているんではないでしょうか。　　（2009.　７．30　朝刊14ページ）

このようにして、現代語でも「ではないか」「かしら」のかたちで、「きっと」と助詞「か」を同時に使用することが許容されている。

しかし、日刊紙の中では、「きっと」と「かもしれない」の共起は今回は確認できなかった。稿者の、あるいは０．２　**問題のありか**で引用した「違和感」は、あながち、偏見ではないと言える。

４　「かもしれない」について

４．１　「かもしれない」との共起例

現代の日刊紙から、「きっと」と「かもしれない」の共起の確例は採集できなかった。しかし、現代の文学作品や日刊紙でも、疑問の助詞「か」を含む「ではないか」「かしら」との共起は散見されるのである。

従って、「ではないか」「かしら」が許容されるのなら、「か」を含む点で関連する「かもしれ

ない」との共起が、一部で生じているとしても、そこには、それなりに「存在理由」があるのだろう。

事実として、「きっと」と「かもしれない」の共起はすでに存在していたのである。

(26)　僕だって君の位置にいれば、きっと積極的に出ろと云うかもしれないがね。

（武者小路実篤『友情』1919年）

(27)　私はきっと腹立ち紛れにポカリと一つ喰らわせたかも知れません。

（谷崎潤一郎『痴人の愛』1924）

(28)　そうすればきっと、私達がそれを希おうなどとは思いも及ばなかったものまで、私達に与えられるかもしれないのだ。（堀辰雄『春』1937）

４．２　「かもしれない」の評価

ここまで、1900年前後からの「きっと」についてのみ考察してきたが、「かもしれない」の側も検討すべきである。以下、「かもしれない」に関する記述のうち、注目すべきもの２点について、その概要を示す。

４．２．１　益岡隆志・田窪行則（1994）の記述

本書は、「概言」すなわち「真とは断定できない知識を述べるムード」の項目を立て、そこで以下のように記述する。

「かもしれない」は、過去、現在、未来における事態の成立の可能性を表す。確かさの度合が低いことを表す「ひょっとすると」「もしかすると」等の陳述の副詞に相当する句と共に用いることができる。（130ページ）

なお、「きっと」については、同じく「概言」の「にちがいない」の部分で言及する。

客観的証拠や論理的推論によらず、経験等に基づく直感的確信を表す。確かさの度合が高いことを表す「きっと」等と共に用いられる。（130ページ）

４．２．２　三宅知宏（1995）の記述

三宅は、「かもしれない」が「にちがいない」と合わせて把握され、「蓋然性」の度合いで比較されること・・・上述の４．２．１も含まれる・・・に批判的である。すなわち「かもしれない」は「可能性判断」であって、同一文に、相反する命題を並べることができる点を指摘する。

（＃５）　泊まるかもしれないし泊まらないかもしれない。どっちにしても相当おそくなる。

（＃６）　半年になるかもしれないし、一年になるかもしれない・・・

三宅はまた、「にちがいない」にも言及する。すなわち「だろう」で代表される「推量」と、「にちがいない」で代表される「確信的判断」は類似するものの、同一ではないことを指摘する。

具体的には、「話し手」が「聞き手」に責任をもって説明をする場面・・・話し手の情報量が聞き手のそれを上回っているのが当然な場面・・・においては、「だろう」は可能だが、「にちがいない」には置き換えられないとする。医師の患者に対する診断場面など、「話し手の確信（思い込み）を述べることは不適切とみなされる文脈」を想定しての結論であるが、的確な指摘であって、従いたい。

三宅の指摘のように、「かもしれない」は「可能性があること」をいうのであり、「100％実現される」ことも「可能性がきわめて低い」ことも「結果的には実現されない」ことをも含意する。

（＃５）は相反する「可能性」を並べ、（＃６）は方向性が同じでも度合は異なる「可能性」を並べる。

「かもしれない」の実現性を「低い」と思いこむと、「きっと」との不整合が生じる。「きっと」は発生的には「ゆるみのないさま」を云うからである。しかし、「かもしれない」は「可能性」のみを判断する。100％実現することもあり、まったく実現しないことをも含意する表現である。

したがって、一般的には、

(29)　またその内あの女の所へ行くかもしれない。いや、きっと行くに違いない・・・。

（赤川次郎『女社長に乾杯』1988）

のように、まず「可能性」・・・ゼロであることも含む・・・のみを提示し、一度「いや」をはさんで「確信」を述べるのである。

この用例（29）は「行く」可能性をゼロから100％まで想定し、最終的に100％に賭けて、「きっと」で「確信」を示すのである。

また、日常の使用場面を以下の（作例）として想定するならば、話し手は事象発生の可能性を100％として行動したことになる。

(作例)　花子が来るかもしれないのでケーキを買っておきました。

原義的には一見不整合を示す共起関係が、何らかの理由のもとに成立する例の一つに、「きっと」と「かもしれない」の例を加えたい。すなわち、「かもしれない」は可能性について、それをゼロから100％まで想定できるのであり、「確信度の低さ」と直結するものではないとの観点に立てば説明がつくのである。

５　関連事項

５．１　副詞と時制

副詞あるいは名詞の副詞的用法が、時制と関わる例はある。２例示す。

そのⅠ「当時」。過去においては、「当時」は「現在」を表すことが可能であった。古語辞典の用例を示すまでもない。明治以降も『日本国語大辞典第二版』は小学読本四（1873）の

昔時は＜略＞然れども、当時は、全く太陽と星は動かずして、日々地球は自ら旋ること

　を知れり。

を示す。さらに1935年森本薫『華々しき一族』の例も示される。

しかし現代語では、「当時」は過去の事象に限定されるといってよい。「当時」は文字の構成から考えても「現在」を排除するものではないが、実際の運用上、「過去」の事象に限られるに至っている。

そのⅡ副詞用法の「今」と「今に」。具体例でいえば、「今、来ます」と「今に来ます」のように、明確に使い分けがある。「今、来ます」と言われればその場を離れられないが、「今に来ます」といわれれば、相応の時間、気長に待つしかない。

多くの語が時代とともに用法を変える。「当時」は、かつてはその事象の発生時点を問うことはなく、時制に拘わらず使用されたが、現代語としては、過去の事象に関してのみ使用されるに至った。

「きっと」は、その発生時は、ものごとが「キチンとゆるみなく」なされることを意味したのであり、時制に関わるものではなかった。用例もそれを示す。

しかるに、現代語の「きっと」と「過去」との関係には、制限がある。すなわち過去の事象でも、引き続き「今後とも恒常的に発生すると確信できる」場合・・・（＃４）など・・・は、「必ず」「間違いなく」の意味を保持できる。しかし、過去において「必ず」「間違いなく」生じたが二度と繰り返されることのない「過去完結」の事象と共起することは・・・1900年前後まではあったにせよ・・・ほとんど失われたと考えたい。

1900年前後からの100年間に、「きっと」は、単なる「過去確認」の機能を失い、今後も繰り返されることを「確信」する事象に限って「過去確認」の機能を保持してきた。しかし、「きっと」の主たる任務は未来（および未確認の現在・過去）を「確信」することに傾斜している。

「きっと」は、運用面で、時制に関わるものとなっており、発生時の原義からは変容していることになる。

５．２　現代語の曖昧表現

「きっと」と「かもしれない」の共起は、「きっと」の原義に遡れば「矛盾」である。現代語が仮にそれを許容し続けるとすれば、それを支えるものとして、しばしば指摘される、現代語の「曖昧表現を好む傾向」があろう。

発話する時点では、相当の確信を持って「きっと」と切り出すが、末尾では、「主張に固執するわけではない/自分としても可能性を言ってみただけだ」を表現するために「かもしれない」を選択するのであろう。極端な言い方をすれば「竜頭蛇尾」タイプの表現形式である。

とはいえ、話し手の自己主張と、聞き手には判断を押しつけないという配慮とを、同時に表現できる「きっと～かもしれない」形式は、それなりの存在価値があると考える。

５．３　「反語」の存在

原義的に「ゆるみのなさ」を示す「きっと」が、「かもしれない」と共起するに至る間には、古典語の反語形式の存在が想定される。「反語」は疑問のかたちをとりながら、その疑問を強く否定し結果として積極的な肯定を意図する。「か」を含みつつ強い肯定を表現するものである。

「きっと」が話者の強い肯定すなわち「確信」を示しながら、疑問の「か」と共起できるのは、日本語に「反語」の歴史が存在するからではないだろうか。

極端な言い方をすれば、若年層の疑問形「寒くない⤴」が・・・「か」はイントネーションに含まれ一般的には文字化されないが・・・「寒い」を確信し聞き手に同意を求める、「強い意志」表現であることと、共通の側面をもっているのではないだろうか。

【参考文献】

仁田義雄（1997）「断定をめぐって」『阪大日本語研究』９　大阪大学文学部日本学科
益岡隆志・田窪行則（1994）『基礎日本語文法―改訂版―』　くろしお出版
三宅知宏（1995）「「推量」について」『國語學』183　武蔵野書院